驛遞局認可

明治十九年二月五日發行

女學雜誌

每月三回發兌
一册正價四錢

東京　女學雜誌社

第四拾號

Feb. 5 1886 no. 40

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Mi wata seba, Hira no takane ni, yuki kiye te;

wakana tsumu beku, no wa nari ni keri. (下に譯あり)

女學雜誌第拾四號目次

開卷。女髪の種類十九●社說。母親の心得、愛育と云ふ事●新報。數件●文學。理學の妻女に入用なる和解、大和歌詞(い)、西洋禮式の大概(第三、訪問の禮)●技藝。食物の料理に心得べき事、繪畫に流派多き事、生花のと●雜錄。髪の結びざま追々に變はりし事、東西女敎の相違、身体を壯建にする事、瓜生の母主君を勵ませし事、義母義子を助けんとしたる美談、居價の妻二十年間髪を梳らざりし事、うぶぎぬ、袖なし●佳傳。小野小町の傳●寄書。山雀を見て感あり、和歌四首、今様一●諸廣告

二月五日

珊瑚の珠

●人清くして貧しきもその心つねに富んで樂みかぎりなし心にごりて逆まに樂まんも三千の佛もよくみ神明怒りを加へ玉ひ見るひまもなし万の事を拂ひつくして善惡の思ひもなく心の光りのしづかなるとき佛の來迎にあづかるにぞ有ける心のまゝにふるまひ人をうやまはぞ酒をのみ勝負を好み耳より口にはなしたろかなる人のみ集め己れが心まゝに居ものは大惡人なり(光明皇后の御詞)

●愛ぞるときは其人の惡かるを知らず後疎くなりては善を知らぞして惡かるとのいよ〳〵あしかるものなり愛して惡を知り憎みて善を知る人稀なりと聖人もの玉へり殊に女の身は高き賤きとなく色をみて枝をたわむのとがあり常に直き心を以て貞心なかるべからぞ(和泉式部)

●人の身のうちに主人あるときは病しきことなし主人なきときは六根おもひ〳〵に募りて身うち安からぞ此理を知るときは万事やすし(寶子)

見わたせばひらの高ねに雪消て
若菜つむべく野はなりにけり

耕耘縮圖

女學雜誌第拾四號（明治十九年二月五日）

●社説

○母親の心得。愛育と云ふ事

今ま茲に二三人の子供を持つ兩親あらんに兩親の心は今も昔しも大なる相違なく其の子供等に對する待遇も左程ど大なる差異あらざるとも二三人の子が皆な同樣の性質を得同樣の人物とならんとは甚だ稀れ也多くは太兄温和にして中子俊秀末子鋭才あるのみならず三人の行爲、志想、等殆んど他人に似たる程のけぢめと出るものなり凡ろ子の親に似るは天理の常にして學文上に遺傳の説と唱へてことぐ〳〵しく言ふものは皆な此の理をとくとなりと雖も實際に於ては親を同ふせる子供にしてかくも互に相ひ異るものなり左れば支那に於ては王侯相將豈に種あらんやと云ひ我が國に於ては氏より育ちと云ひて子は必ずしも親に似るものにあらず必竟その教育次第によりて變化すべしと云へるに至れるは亦た一應の理由あることにして彼の同腹同種の兄弟が互に均しからざるに至るも盖し之と教へ育つる場合の前后に同じからざりしに由ることと知るべし

一家に於て育つる子供そら尙ほ如此し教育の工合如何によりて人の性質を變ゆるの甚しきなければ之に依りて推知すべきなりされば上が上にも教育に注意して其子を育だてなば假令ひ卑き身分の子なりとも王侯相將の子を造るべきとは難きにあらざるべし然るに子供の教育は專ら母親の心得に關はることなるを以て母たるものはよく〳〵心掛けて教育を輕ろ〳〵しくせず勉めて之を教ゆるの道を學び置かざる可らずされば古人は云へりナポレヲンを造りたるものはナポレヲンに非ずして其の母なり孟子を聖ならしめたるものは孟子に非ずして孟母なりと凡ろ母にして其子を聖人とし英雄となさんと欲するものは亦た彼等の母たるべき心得あると要するとなり

然るに今日我國に行はるゝ母親の育て方を見るに吾人の愕然として驚悲すべきと多し先づ其の上流と云ふものに就て之と見れば母親の子に於ける猶ほ他人の相交るが如し成るべく子の前に笑はず子の前に心中を明かさず起居坐臥一々嚴肅にして恰かも箱を轉ずるが如し心のうち盖し愛深かるべし然も成るべく之を現はさゞるやうにして子を遇する寒冷万事儀禮の中にあらざるはなし此故に子の母親に待するも亦た然り其の起居坐臥はよく謹みたり其の言語應對は甚だ靜かなり然れども母の前にあるを窮屈として恰かも王者長官の目前に出でたるの心地を有ち成るべく其の居らざる所に在りて獨り自由ならんとを望み他出して

ハ家ニ歸るの心餘りニ切ならず家に歸りてハ母ニ面するを非常の喜びなりとせず其の間自然ニ隔情を生じて面白からざる出來事も遂ニ此れより起り來るものなりとぞ」又た其の下流なるものに就て之を見れバ茲ニ記すれども尚ほ筆のしぶるを覺ゆる程に哀れなり母ハ子を呼ぶに餓鬼と唱へ畜生、馬鹿野郎、ハ其の異名となり歸ると遲けれバ叱り出ると遲けれバ叱り叱りて可かざれバ叩き叩きて可かざれバ追出し一家内恰かも敵の巣屈の如しされバ子ハ母に對するも亦た甚だ冷寒にして母の言ハ舊古人の言としてきかず其の怒り聲ハ雷のひゞきと見て感ぜず其の己を叩くときハ心中に既に反對の念を起し家を出でゝハ家に歸るの樂みを知らず母を見てハ決句不快なるの思地を懷くに至ると自然の有樣あり人間茲に至りて母子の樂果して何の處にかある亦た其の子なるもハ如何にかして聖人英雄とならん子を育つるの母ハ反つて子を陥るの母なり母を養ふの子ハ反つて母を苦しむるの子なりあゝ人間茲に至りて果して何の樂かある

下流の教育もとより不可なりかの上流に行ハるゝ母の教育と云へるものも亦た決して宜しきを得たるものにあらざるべし那の如くせバ子もし過誤を爲して母の之を叱りこらさんとき子たるものハたゞ母の怒をおそれて之を止めんとするのみ止めんとして止む能ハざれバ母ます〳〵怒りて之を切諫し遂にハ之を打ち叩きもすべし此の時子ハ或はろの過誤のあしかりきと知り母ハ己を叩くとは至當なりと悟りたりとも母の己を愛するとは決して悟り得まじ母の之を打ち叩くハもと子を愛するが故なり然れども子にしてよく此の心を汲み譯け打ち叩かるゝごとに母の愛を感じてます〳〵之ニ親むが如きは實際に於て甚だ少きとなり時としてハ母親の言葉により（お前を可愛しと思へバこそ斯く叩きもするなり母の心はお前が成人したる后ちに悟らるべしなんど言ひ譯する母親もあり）時としては他人の教により母親のかくも嚴しきハ自己の爲めを思ひての故なりと悟り得るとありとも到底此の切諫の爲に母へ對する愛を增すべきとハあるまじたゞ僅かに之を不平とする心持を散ずるまでなり必竟如此くして子を教ゆるとハ子の過誤を全く止めしむる良策にあらず亦た子をして母を思ハしむる工夫にあらずたゞ或る學士の云ふ所の愛育なる者を施さゞれバ到底十分の教育ハ爲し得まじき也愛育とは子供を非常に愛して愛しいつくしむの間に之を教へ導くの工夫を爲すとなり彼の上流の母なりとも心には並々ならぬ程に子を思ふなれども若し其の愛を表にあらハしなバ所以るアマヤカシとなりて子が其の言葉を用ひざるに至り遂にハ之を教

へ導くと能はざるに至りなんとの心配より表をかざりて特更に嚴肅にするとなるべしと雖も愛育の道に隨ひて之を教ゆるときは如何程に愛を表にあらはし其子を心に思ふ程に悉く慈しみたりとも決して子として母を輕ろしめないがしろに思はしむる如き患あるなく斯くしてます〳〵愛する程をよろしとするとあり先づ子供のいと小さときは其の友人の如き心持にて常々之をいつくしみ子供をして好き仲間を持てりとの感を懷かしむる程にすべし稍や物心つきたる比ひには其の保護者となりて何事にも心をうちあけさせ最と瑣細れ事、笑ふべき事、なりとも已の心をも幼にしてよく〳〵之を聽き其の相談相手となりて万事に之をまもるべし子供に母なくては遊ひ事も出來ず他所へ行くとも出來ず万事に之に賴らざれば不安心なりと思はする程にすべし又た既に少年となりたりとも決して之を成人したるものゝ如く待なすとなく母親は自ら若き昔しを覺えて子供と共に讀書し子供の爲に書を敎へ子供の爲に字を書るし万事ろの學び事の相談相手となりて親しみ少年の心に母なくては一日も學文を爲し得ざる様に思はせて日々に其の愛情を密かになさしむべし斯て万事に子供の友となり子供を心限り愛すると愛育の趣旨にしてかゝる間に子供を敎ゆるの工夫存するとなり

（次号へ）

●新報

○御歌會初

讀者　正四位勳四等伯爵臣源朝臣詮上（松浦）

（つゞき）

色かへぬうてなの竹は千代とへてうれしき節のかずやそふらむ

同侍從從四位勳四等子爵臣藤原朝臣公業上（西四辻）

おほみやのみはしのもとのかは竹はいくよかさねし緑なるらむ

發聲　從四位子爵臣源朝臣有良上（綾小路）

あたらしき年をむかふるふしごとに千代のいろそふそのゝ呉竹

講頌　從四位子爵臣源朝臣重朝上（大原）

いろかへぬ臺の竹にみゆるかなかぎり知られぬ御代のさかえも

同　從四位子爵臣藤原朝臣爲柔上（冷泉）

よゝを經てみどりかはらぬ九重のみかきの竹のかげぞひさしき

同從四位勳三等子爵臣大江朝臣元敏上（毛利）

大庭の竹のしげみみかぎりなききみがちとせもこもるなるらむ

講師　從五位子爵臣藤原朝臣安斐上（脇坂）

としとへて色もかはらぬ呉竹はとほなかきよのすがたなりけり

講頌　正四位臣平朝臣信成上（長谷）

生初しはじめはしらずなれみてもひさしくなりぬ竹のみどりは

○夫の爲に書を讀む　英國公使館は書記たる英人某氏も先頃ろ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

法律學士の免許を得ん爲にとて日夜試驗の用意を爲し玉ひけるに六ヶ月前ほどより眼病となりて書籍を見ることを得玉はぬより其れ細君は四人の子を育てながら夫れ側に日夜法律れ書類をよみきかせ六ヶ月間一日も怠りなくして遂に用意を爲し玉ひければ試驗の當日某氏は及第して恙がなく法律學士の免狀を得られたりとぞ其の時試驗掛の人は某氏眼を患ひて文字かくことにも不自由なるべければ細君を伴ひて之に書かせなどさるゝとも不都合なしと云はれけるに某氏は「吾が妻は六ヶ月間吾が爲に數多の法律書を讀みきかせたれば吾ほどの學事をも承知し在らん之を伴ひて不公平の試驗となりては反つて不快に候」とて斷はり玉ひしとぞ吾が國に絕えて無かるべき美事なり世の令閨がたはつね／＼かゝる御心持のあらんことを乞ふ

○帽子と靴　束髮さるゝ人々の如何やうともあれ早く帽子を冠られたき旨は本誌の第十一號に書き載せたる通りなり束髮發起の人々の此頃は何となう物靜かに在り玉ふころ憾なれ一盛一衰は世の常なりましてかく寒氣の爲にとて衰へたるとりに臨みては早く之に應ぜるの計を爲されたきと前号に吾人が述べたる通りなり」就きて亦た一つの言ふべきことは婦人として靴を穿たしむることなり靴の步行に便なることは言ふまでもなきことなるが今の日本婦人の如く着物の着樣自らに重りくるしく步行に不便言ふ斗りなき上に高く轉げやすき駒下駄を穿ちて步行さるゝは最と困難の事なるべく之が爲に外出にものうく車に乘りたき心增し萬事に不都合なり靴を穿ちなば此等の不便皆な去るべし之に加へて一の都合よきことは今の日本婦人が步行の際衣服の開くし其に脛のあたりまでを現はして恬として愧ぢ玉はざることなり此は實に西洋人の見て野蠻の極みとするのみにあらぜ吾等日本の人々之を見ても心あらんものは皆な不快を覺ゆることあり然れば靴下の少しく長きを穿ちて脛を悉く被ひ玉ふ都合とせば此の弊も失せ申すべきか兎に角靴を用ふるの便利はくさ／＼ありて一つの害もあらざるべし只だ新なる風俗行はるゝときは人々いろ／＼に言ひはやすものなれども此は志あらんものゝ顧みであるべきことなり世の母人及び娘孃諸君よろしく自ら新風俗を造り玉はんやうに覺悟あるべし

○新聞紙と緣日寄席　なべて母親たらんものは其の子特には其娘を敎育するに少かの事なりともよく／＼心掛ざる可らぜ今ま其の人々の購ひて讀み玉ふ新聞と見るにまゝ淫奔卑陋の事のみを記したる不道德の小新聞にして密通の續き物、間夫の以下次号に心をこめて日々に樂しみよみ玉ふやうの事あるは尤も歎

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

くべきをなさば母親たらんものはよく〳〵之に心掛けて其の子に讀まするものは注意せざる可らず小新聞中にも讀賣新聞の如き大新聞中には時事新報日々新聞の如き尤もよろしきものなり又た寄席までは女郎買の話し酒飲の狂言なんぞ卑やしきことのみを語りつゞくるを愧ぢもせで母娘もろともに笑ひ作らきゝ玉ふとは見るも忌まはしきことなり又た縁日の如く人込にして何の益もなき所へ娘をやることは母親の制すべきことなり此他いろ〳〵の心得べきことありと云へど大抵此の類のさゝめごとの様見ゆるものにまで心掛くることは母親の務めなりと知るべし

○二階番　前号に三助の改良と題したる一項を掲げたるに絵入新聞は之を抄録して且つ二階番をも改良したき旨の附言ありたり實に二階番は男子を淫奔に導く初段にして之が爲に遂に身を誤るに至るもの多ければ政府に於ては早く之に注意あらんことを乞ふあり湯屋一汎の定札には湯番は一切客の衣類等に責任なきものとあり湯番にして尚ほ然ることを許し乍ら別に衣類を預ることを名として淫事を專らとせんとする二階番を置くを許すとは警察の行届きたるものにあらず特に二階番の婦女たるものは裸体なる男子と下卑なる淫語を談りつゞけて愧ぢとせざる如き之を見るだも忌まはしき限なり吾人は絵入新聞記者と共に政府に於て早く之に注意あらんことを乞ふ者なり

○娼妓の保護　朝野新聞の報ずる所に由れば政府にては近來娼家の亭主に往々不心得あるものありて其の抱への妓の自由の身とならんことを反つて好まざることとなし成るべく之を引止るの行あるのみならず間ま不信切の取扱ひを爲すもありとの由をきゝて若しかゝる抱主あらんときは娼妓より密かに最寄りの警察署へ届け出づべし速に保護の取扱を爲さるべき由の達ありしと或は云へり世間にては此とても十分なる保護のやう思ふ如しと雖へども吾人は是れ尚ほ寸をためんとして尺の曲れるを顧みざるものなりと信ぜり政府に於て速に娼妓を禁止し婦人をして如此き卑屈の地位に陷らざらしめ亦た男子をして其の行を汚がすの地なからしめずんば決して眞正の保護を爲し玉ふの處置ならずと考ふなり嗚呼誰れか奴隷の商賣を見て事の尤も惡むべきものと爲さゞるあらんや然るに今ま尚ほ此に類似せる商業の公然我國に行はるゝを顧みずして一人の之を禁ぜんことを欲するものなきは慨歎の極にたへざる也

○懸想文　京都にては曾て懸想文と云ふものあり洛東清水の弦召指(僧位)か毎年一月十五、十六の兩日市中を賣歩くを例とせしに暫く中絶し居たるを近年之を再興し去る十五、十六の兩日市

中を實歩きたるか其扮裝ハ赤き布衣を着し白布を以て頭面を覆ひ纔かに兩眼を露したり賣る所の懸想文と云へるハ神符の如きものにて之を所持すれバ良縁を結ぶとか云ふより若き男女ハ先を爭ひて買求めたれバ懸想文賣ハ意外の利益を得たりとぞ

○宣教師バヲ氏の夫人　米國宣教師バヲ氏の夫人ハ此程より京橋區槇町の教會堂に於て毎木曜日午後より近傍の少女を集め無謝儀にて衣服の飾り手袋の仕立を教授さるゝよし

●文學

○理學の妻女に入用なる和解

婦人の學ぶべき學文の上が上にも高くして男まさりにもあらんと固より望むべき譯なりとハ云へ先づ一と通りの教育には手習算術の大畧を心得、手帋をかくに不自由なく、裁縫經濟の術をも心得なバ此にて足れりかの窮理學、化學、生理學なんど云ふ如きいろ〳〵の理學は學び置かても事足りぬべしと思ふ人あると大なる誤まりなり昔しより論語よみの論語知らずと云ふとあるは論語を讀みても之を實際に用ゆるとを知らざる迂濶の愚かさを笑ひたるとなるが何事にもかゝる覺悟にても益となると少かるべし例へバ論語と云ふとも世間の實際にハ用なけれども若し貴人の御論を聽きたりとか彼方の御語が云々とか云ふときにハ無用なる文字も直ちに益となるとにて學文を働かすと働かさゞるとは必竟此の一例の如きとなるべし然れバ如何に理學を學びたりとも若し論語よみの論語知らずにてハ何の効もあらざるべし若しよく之を實用して卑近の事にも適てはめなバ大なる利益とも直ちに得べきとなり

例へバ妻君に就て云ふも竈に薪を燃やすも工合の如何に由りて薪の費え夥しき多少あり薪の乾きたると否らざるとを用ゆるに由りて亦た大なる損得あり此等も皆な窮理學の心得あるものゝ容易に悟り得べき所なり。又た物を煮るに一時間にて煮へ上るべきを僅かの藥を混せて二三十分にて煮上る方あり衣服の染め直しに心得次第により新品にまさる程どの美品となす方あり此等ハ皆な化學の心得あるものゝ容易に悟り得べき所なり。又た女の一大事と云へる姙娠の時に臨み胎子發達の工合を知ると知らざるとにて分娩の節若くは姙娠中に困難なると否らざるとの差違あり産れたる子供を育つるときに當り乳の性質と子供成育の理合を知ると知らざるとにて子供の壯健なると否らざるとの相違あるのみならず甚しきハ之を生かし之を殺すその大相違を來すとあり此等ハ生理學の心得あるものゝ容易に悟り得べき所なり然れバ實際に迂遠なる如きいろ〳〵の理學と雖も若しよく之を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

用ひなバ非常なる効能あるものなれバ妻君に理學と切要とせぜなんど思ふも大なる心得違ひと云ふべし吾人も此れより追々に理學と通俗の實用に和解して右に述べたる緒言の僞りならぬとを証しそべし

○大和歌詞　（い）

●いまち月トハ十八夜ノ事○いもせトハ夫婦の事○いなゝきトハ田舍○いなつまトハ果敢ナキヿ○いさよひの月トハ十六夜ノ月○いはれしトハ中絶タルヿ○いきたなしトハ强ク寢タルヿ○いなふねトハ否ニハ非ズト云フ思○いりふねトハ今ニ遇ハントト云フ心○いとえけしトハ暫ク待テト云フヿ○いとどのせきトハ天ノ事○いさりふねトハ魚トル船○いなせとせぬトハ否トモ應トモ云ハヌ事○石なみ小川トハ石多キ河○いきすたまトハ靈魂○いさゝくれ月トハ六月○いろとる月トハ九月○いさゝかけ舟トハ帆掛船○いのちの水トハ涙○いさゝ水トハ庭ノ潦水○いゑをろそトハ網ノ事○いつさトハ出ル樣○いさよふ月トハ出デヤラヌ月○いちめトハ物賣ル女○いくてトハ船漕グ人○いなむしろトハ田舍○いねハ姉○いろねハ妹○いぬきトハ人ノ一名○いまートハ今○いへづとトハ土產○いひしろトハ互ニ○いさゝ川トハ水の鮮ヤカニ流ルヽヿ○いつまで草トハ永キヿ○いゑみ潟トハ恨ム心○いきふれトハ穢ハシキヿ○いもかかりトハ女ノ許○いろなき人トハ心ナキ人○いもせ鳥ハ時鳥○いゑまくらハ七夕ノ合フ夜ノ枕○いぬるついたちトハ三月一日上の巳の日○いきときハ寢ラレヌヿ○いさなとりハ魚ノ總名●

○西洋禮式の大概

第三　訪問の禮（人を尋ぬる時の禮式）

凡ろ人を訪ふて名札を出そにハ訪ひたる心持の次第に隨て其の名札の四隅の一つを折り置くとなり之を思違へて喜ぶときに悲しみの隅を折るなんどの誤なきやう心得べし

上の右角を折れバ　一般の訪問　（P.F.V.）
上の左角、、、　慶賀の、、　（P.F.）
下の右角、、、　暇乞、、、　（P.P.C.）
下の左角、、、　哀憐の、、　（P.C.）

四つの場合の時其の隅に右に記るしたる如き英字を記るしおくを正當とそ

自分喪にあるときは名札の四邊を墨にて塗りたくべし

妻ある人は夫と妻との兩名を合せ記したる名札を常ょ所有しもろともに訪ひたるときハ之を出そべし

新嫁の夫に嫁したるを直ちに行て訪ひ次で其の兩親を訪ふ如き

或るも其の子の生るゝに當て産婦を尋ぬる等ハ慶賀の訪問なり朋友たるものハ成べく速に行て之を尋ぬべし

朋友の喪又ハ災ありたるときハ一應行て之を訪ひ（名札のみを出すこと）其の返禮ありたるのち再び行て之を尋ぬべし

平常一汎の訪問は午后二時より六時に至るまでを限りとす

妻君一人他を訪ふときは自已の名札に夫の名札二枚を加へて其家の夫婦に出すを正當の式となす

一汎の訪問ありたる后ちは三四日の内に返禮せざる可らず

男子ハ訪問の時帽子幷に杖等を客堂に持ち入り其の兩手を用ひざる可らざるの事あるに非れバ終始之を攜へ若し手を用ふべきことあれバ之を地版上に置くを禮とす

●技藝

○食物の料理に心得べき事（三）

前号には食物を料理するハ都合六つの目的を達すべき爲めなる趣と述べました何の料理にも此の六の事を皆な均しく心掛けんとは成し難き義なりとハ云へ成るべく勉めて此等の目的を達するやうに致さゞれバ切角に料理したる甲斐なきものでありませう然るに此の六個の中一とつ二つは我が國民もよく〳〵心掛け居るやうに見ゆれども左の四ケ條に至りてハ敢て心を留めて累りに料理さるゝ如く見ゆるハ最と歎くべきことなり

一　食物を柔らかにする事

二　消化を容易くする事

三　食物中の虫毒を殺す事

四　食物の滋養質を保つ事

先づ第一に食物は腹中に入りて胃臓の消化を受け初て身体に効能ある滋養物となることなれバ其の柔らかなると否とに由りてハ消化に大なる相違ある者なり例へバ牛肉の軟かく煮たるハ二時四十五分にて消化すると云ふに其の炙りて乾かしたるものハ三時半を經でハ消化し得ず豚肉の煮たるは三時間にて消化すべきも其の炙りたるハ五時十五分を要するが如く柔らかなると否とによりて消化に大なる相違あり彼の鶏卵の如く半熟にしたらバ甚だ早くはなるべきも之を油煮にすれバ消化の甚だしく困難なるが如く料理の次第にて柔らかとなり又た硬くもなり隨て消化不消化の違を來すなり然るに現今我が國の料理にてハ毫も此の二点に注意せざる如し」第三に食物中の虫又は毒物を殺ろすことも亦た甚だ大切なることにて特に流行病などあるときハ尤も此の一点に心掛けざる可らず例へば豚の肉を食ふに當りても若し一度び沸騰点の熱氣にて肉の中心までとも温めざれバ虫の卵を殺

水のかたちを述べ仁義禮智信の五德を序で主從客位春夏秋冬の差別を明かにし場所柄に隨つて忌むべき草木を定め祝言、五節句門出、おたまし、神事、佛事、なんど皆な一々に異りたる心得方あり客の女なるか男なるかに隨て馳走の生花に風情を異にせしむるなんどくさ〴〵の六ケしく煩はしきことありされど此は茶の湯とは違ひ幾分か風趣の念を養ふものにて必竟よく生けたりと云へる花は眼に見て快よく感ぜべき趣なくては不可なるとゆゑ之を少々心得置て高尙の念を養ふべき草木は類を一室中に安んじ朝たに夕べに眺めんとは亦た益なきにあらざるべし只だ從來の如く徒らに日月を費して其の道の奧までをも學び得なんと思ふとは今の娘孃に無用なるとなるべし

●雜錄

○髮の結びざま追々に變はりし事

髮の結び樣の時代と共にうつりかはりし趣は本号開卷の第一葉にあらましを書がき列らべたる通りあり此の外にも尙ほいろいろの結びざまありしとは勿論なれども文に見ゆるのみにて其の形の今に遺らざるあり今に遺りて人の常に承知するものあり此等をば省きてたゞ珍らしきと明かに圖の遺りたるもののみを前に掲げたれば左に少さか其の書ときを爲さなん

唐土は國の開闢より女も髮を結ぶ風俗なるゆゑその世〳〵の結びやうも名あると彼の國の書どもに散見する所ろいち〳〵あぐるに遑あらぞ然るに御國は神の代より女は垂髮なるから髮のゆひやうに名ありしとさらになし然るに人王六十代醍醐天皇の御世にいたりて結髮するに寶髻といふ名初て延喜式に見えたり安齋隨筆に上つ代の結髮といふは垂髮を頂の上へとりあげて瘤の如くにしてそれを結ひて釵子を刺すなりと云へるもの即ち是れなり圖中の○七と○八とは即はち此れなり但し此に見ゆる釵子はいと後れ世に行はれたるものなるべし

又た第○三も源氏若紫の卷に紫の上の十才なるを「髮は扇をひろげたるやうにゆら〳〵として」とあるものゝ圖にて其の比ろの童女の髮のさまなり

第○四は放髮と云ひ伊勢物語にふりわけ髮と云へるものこれなり第○五も亦た同じものなれど前は十六七才の有樣を示し后は十三四なるものゝ姿を現はせり

第○六は唐輪ゝげと云ふものにて昔しは男子の結びたるものなれども天正の比ろよりして中人以下の女つね〴〵結ぶとゝなりたりと云ふ

第○十は足利の比ろ物買ひ物賣る女までも皆な下げ髮にしたる樣

ろそあたはざるより之を食ひたる人の腹中に於てその卵孵化し所云る蛕出なるものを生ずるとなり然れば西洋人はサシミなんど云ひて凡そ肉の生なるを食ふと云ふは絶へてこれなき程によく此の一点に注意せる者なるを我が國に於ては毫も此に注意せざるの料理方まゝ行はるゝとなり」第四に食物の滋養質を保つと是れ亦た切要の点なるに拘はらず我が國人は尤も甚しく之に注意せざる如し例へば牛を煮るに汁を多くして汁を飲まず魚を煮るに汁を多くして汁を飲まずたゞ其の肉のみを食ふと之を喩ふれば猶ほ牛肉の粕なるものを食ふに似たり蓋し西洋にてはビーフソップと云ひて牛肉を煮て其の滋養質を煮出したる汁を牛乳の如き効能あるものとし珍重して飲用するとなるが其の煮出したるあとの肉は粕にして亦た益なきものとせり然るに我國の肉又は魚を煮ると恰かもビーフソップをとる牛肉を煮るの工合にして然かも其汁は用ひずたゞ其の肉を食ふと恰かもかの煮出したる殘りの粕肉を食ふに似たり身体に實益ある養分は殆んど失せたるものと知るべし然れば西洋料理に於ては汁物とては更になく肉を煮焼するとも皆な肉の成分を外へ流し出さゞるやうに注意する程なり我國の料理方若し此の点に於て特に改良せざるときは切角滋養品を食ひたりとも實際身体を益すると甚はだ少かるべきなり

以上四つは事こそ現今の日本料理に欠けたる所なれば此れよりは成るべく此の四つの点に注意して料理の方法を改めざる可らず此れ女たらんもの丶尤も心得おくべき要件なりと知るべし

○繪畫に流派多き事

吾が國に行はるゝ繪畫にも流派多きものなり先づ土佐、狩野、南宗、北宗、圓山なんどは人の知る所なれども此他に尚ほ春日、宅磨、琳、住吉、巨勢、一蝶、南北合法、南蘋、文晁、岸、雲濤、聖、菱川、長谷川、歌川、宮川、浮世、四條、呉春、鹽川、横山、望月、上田、呑舟、北齋、容齋、雪舟、老山、鈴木、美竹、梲元なんどの諸派あり此外には蕪村、鳥羽繪、なんどの流もあるなり

○生花の事

生花は人皇三十代欽明天皇の三月三日桃神山の桃を切りて御生けありたるより初まりたる遊び事にして其后は何くれとなしにいろ〳〵に挿して床のかざりとなしけるが東山義政に至りて初て東山流と云へるを起し其れ后ちいろ〳〵の流派わかれたるとなり近代となりては昔しわけもなく定めたるとを嚴しき儀式と見做して或は枝葉に陰陽とかたどり枝に眞行草の三つを比らべ或るは天地人の三才を配ばり過去未來現在を當て木火土金水空風

を示し第九は德川初代の頃ろの下げ髪を示せり
第十一は承應の比ろ世に名高かりき勝山の結びはじめたるより勝山と名付けたる結び樣なり
第十二はかうがい髷と云ひかの下げ髪したる奉公人なんどが其つとめを了りてうち〳〵の局に入りたる后ちぐる〳〵とまとして笄にて仮に止めおきたるより起りたる風なり
第十三はたぼを出したる結樣にして御所にて垂髪せぬほどの女中の結びたる風なり
第十四は島田まげの初の樣第十五は兵庫曲と云へりしものなり
第十六は横兵庫と云ひて兵庫の一變したるものなるが天明寛政の比ろ北廓に汎く流行したり
第十七ハ享保の比ろ吉原の遊女等がゆひたる樣なり
第十八はびんさしを入れたる結び風にして天明より寛政にわたり大に流行したるものなり其のさまの追々に華美になれりしを見るべし
第十九は足利東山殿の比ろビンブツ髪の毛にて圖の如き三つの者を製し頭に付けたる樣を示し第一圖は小供のそりのこしの体むかしよりありし趣を現はせり

○東西女教の相違

東洋即ち孔子の教の流行したる支那日本と西洋即ち基督教の流行する歐米各國とは其の婦人の教雪と墨とほどに違ひて其の間に著しく差別あり東洋にては女を人間に足らぬものゝやうに見做して之を壓制するを常とし西洋にても女を男の助手として之を護り之を愛するを男子の務となせりされバ一は自由に發達していよ〳〵進み一は不自由に束縛されてます〳〵退くと免れがたき勢なりと云ふべし今ま一話を擧げて兩教を正しく守る女の心得方の双方に著しく違ふ趣を示すべし

維新前梁川星巖が探吏に追はれて跡をくらましたるとき吏星巖の家に至り妻なる香蘭に迫り夫の行きたる方を白狀せしめんとしたるに香蘭の云ふやうは吾が夫星巖は大丈夫に候へバ一婦人に大志を語るべき物には候はず況して其の行くさきなんど告げ申すことは大丈夫の爲すべきことに候はんやと云ひて答へければ探吏も其の賢なるに感じて出で去りたりと云ふ然るに此に似たるは西洋の或る國に某と云へる愛國者あり此も亦た同樣にして逃れ去りたるに捕人之を索めんとて其の家に至り妻に迫り問ひたるとき妻の云ふやうは御尋ねの夫のことに候か如何にして夫の在家を知らせずに安んぜられませうや一日だも忘れぬ吾夫のことよく〳〵承知いたし居り候と申しければ捕

吏はせき込みて然らバ何處なるぞ明に申すべしと問ひ反したるときさらバにて候妾の愛する夫は妾が三寸の心の中に在れし候と申しけるにぞ捕吏もことごとく感じ入り故なくして出で去りたりとぞ

此ハ瑣との話なれども孔子の教を奉ずると基督教の旨を信ずるとにてかゝる大なる差違を來すヿなり凡ろ夫婦をして眞に相ひ愛さしめ夫をして妻を同様にいつくしましめ妻をして自由に發達せしむるものハ實に基督教にあらざんバ不可なり吾人ハ日本に婦女を眞正の開化に導き優温貞和操烈の諸徳を兼ね備へしめて而も國家の益となるべき活潑の精神を懐かせんにハ基督教を之に守らしむるヿ最良なりと確信するものなり

○身体を壮健にする事

婦人は身体がよわくして動ともすれバ病に陷いり易きほどの質なれバ特に運動をつとめて其身を壮健にするヿを心得ざる可らざ此れ吾人が前号に於ても少しく述べ置きたる所なり茲にエリスと唱へ婦女の教育に熱心してかつて娘鑵篇と云へる書物をも現はしたる女學士が其の書中に自ら經驗したる方法なりとて身体を壮健にするの心得を記るされたるを見るに大畧左の如し

第一　に毎日一二時間必ず運動する事。此は如何に雨天の時なりとも成るべく止めずして行ふべしいろ〳〵の頭痛食事の不進、肩下の痛み、側痛、足寒、血環の不順、等ハ皆な運動の足らぬより起るとなり

第二　に夜早く寢ぬる事。此も亦た大切なるヿなり顔色青く感覺強く（心經質の人なり）情緒のかハり易く毎日朝の間ハ忙然として晩れ方よりにハかに活潑となり夜る談じ合ふヿを好む如き婦人ハ皆な夜早く寢ぬるヿを爲さゞる人々にして如此きハ遠からずして非常の害を蒙るべきもの也

第三　にハ食物の量を一定する事なり。此ハ別段に言ふ迄もなきヿなれども實際に於てハ甚だ難きヿありよろしくつゝしむべし

第四　ハ四季々候に隨て衣服を相應にするヿなり此も亦た言ふ迄もなしと雖も婦人にハ特に心掛くべきヿなり

右四ケ條をよく〳〵心得なバ身体自然に壮健となりて心持ちまで快活となるべしとなり

○瓜生の母主君を勵ませし事

延元の亂に瓜生保、其弟義鑑、源琳、重照、等兄弟五人共に脇屋義治を奉じて主將として越前の國杣山の城に據りて在りけるが敵將高師泰と戰ひて保義鑑等死したりしかバ源琳、重照、等散卒を收

めて再び柚山に還りたるに城中の士卒殘るものわづかなりければ皆力なしげに見えたるを保等の母聊も憂ふる色なくして義治の前に杯を持出で、云へらく妾が兒等不肖にして此度の戰に敗を取り君の心を傷ましめたり然れども幸に二子死したれば少しく罪を謝するに足れり兒輩固より君の爲に事を擧げたるうへは意の如く賊を平らげたらんには假令へ千百の子を失ふとも妾に於て更に悔る所なし今二子猶存してあれば再び事を擧るに足れり之れ妾が哀を轉じて喜びとする所なりとて酒を勸めたりければ之を見るもの感激せざるはなかりしとぞ婦女子の性として何事も一たび敗るゝときは其氣忽ち沮して志を喪ふもののあるに此人寡婦の身として忠義の志し厚く愛子二人を失ひても再擧を謀りて聊も屈せず義治が將に挫けんとする英氣を勸め起したるは其忍耐の强き男子も耻ぢる所ならむや

○義母義子を助けんとしたる美談

齊の宣王の時人を殺せし兄弟ありし之を逮捕へて拷問ありしに弟はわれ其ものを殺したりと云ふに兄はわれなりと云ふ宣王其母を召して尋ねたまふに母は其弟を殺して兄を助けたまはれと申ければ王其由を問はしめたまふに兄は我がうむ所にあらぬ義理ある中の子なれば助命あれよと願ひける王其義あるを感じたまひ兄弟ともに助け母を賞して義と號したまふとなり

○唐僖の妻二十年間髮を櫛らざりし事

唐僖と云る人直諫して君の怒を蒙り嶺南と云ふ遠き山國に逐放たれけるが門を出るに臨みて妻薫氏に申されけるは此度の事法の爲に罪せらるゝにあらざれば皈り來つべきこと覺束なく况んや生死の程も測られず然るに汝は未だ年少にて幸ひ子だにあらざれば空しく獨住して待ちび給はんより自ら行末計ひてよらむ方もあらば心置なく行きねかし今は暇遣すべしと懇ろに謂はれければ薫氏泣々答ふるやう妾夫君に嫁するうへは夫君の不幸は妾の不幸假令ひ如何なる事ありとも再び他家に嫁すべき心なし願くは妾をして女の道を全ふせしめ給はれとて麻縄を以て髮を束ね其結目に封を爲し夫に請ひて手づから文字をしるさしめ自ら誓ひて思らく夫君首尾よく歸來り給はゞ幾歳經るとも此封を解じとて多年一日の如く衣裳を改めず髮に油ぬらず貞節を貫しが漸く廿年を經て夫皈來りにければ始て夫に請て彼時封ぜし結目を解給はり初の如く事へ侍りけるとなん

○うぶだぬ

うぶだと云は本名うぶぎぬなり産衣を着くなりうぶぎぬは小兒誕生の時陰陽頭に仰付られ小兒の性に合て吉き色をかんがへさ

せて其色に染めて召するも古法なり然れど其儀なき時は白と空色とを用うる法なり近世糸にて花形など縫ふも古へはなきとなりといふ

○袖なし

賤き者の着る袖なしと云物も古へは手なしと云袖は衣の手なればてなしと云なり古今著聞集に下﨟の着るてなしと云ふ布着物を着て鎌を腰にさしてかみ笠となんきたりけるとあり

●佳傳

本号よりは他の欄料多きに付羅馬婦人の傳つゞきは次号へ延し次号よりは新奇の續物婦傳を掲ぐると定め向后は成可他欄に愛を割きて佳傳の欄内を多くする様いたすべき望なり

○小野の小町の傳（拾壹号のつゞき）

かくて其野を玉造の小野といひけるとなり但し此事いと怪しく論ずるにも及ばぬ妄説なれどふるく云ひ傳へたるにや顯昭の説にも小町は數ヶ年在京して好色の人なりしかど本國へ歸りて死せしにより八十島に屍のありしとて此のあなめ〳〵の歌とも載せられたり又た玉造小町壯衰書といふものありてさしも美人の名高かりし小町も年老て道の傍に食を乞ひかばねを野べにさらせしとを漢文のさまに書て其書の作者を安倍の清行も空海ともいひ傳へたれど弘法大師は承和のはじめに遷化せられし故ゑ小町とは時代違ふよしを兼好もいへり此の書の玉造と云ふ名の事無名抄の玉造は小野の説にかよへり且つ此の壯衰書はつれなき作りものがたりなれば此の事をふるくいひ傳へたるにや東鏡に建暦二年十二月御所に於て繪合ありしとき大江廣元の献せられし繪は小野小町が一期の盛衰の事なりしが其の日の繪數巻のうちにて御自愛ありたるよし見えたりこれらの説どもをとりあはせて卒都婆小町關寺小町などの謠ひは作りたるものなるべし又た小町が雨乞のうたとて

ことわりや日の下なれば照りもせめさりとては又天が下とは

といふてにをはも合はざる拙き歌を世に云ひ傳へたりこれは慶長の頃ろあるものゝ詠みたる狂歌のよし雄長老の狂歌百首といふものゝ附錄に見えたり眞の小町の雨乞の歌と云ふは小町の家の集に

あめにます神もみまさば立さわぎ天の戸河のひぐちあけ玉へ

と云ふ歌なりこれに混じて右の狂歌と小町のうたといひ傳へたるものなるべし猶ほ小町の事に付きていふべきとあまたあれどくだ〳〵しかればもらしつ

（完）

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

●寄書

○山雀を見て感あり　大坂　菟道春千代

秋の日の空曇りして最と物憂しと思ふ日も獨り美はしきは庭れ面に紅葉なす木々の葉のみにて又眺むべき者とてもなき儘に只うつとりと佇み居たりしが折しも庭の松が枝に懸けし鳥籠より山雀の聲を發せしにふと心づきいで是より山雀取りを試みんと思ひし故其籠を手に提げて程近き陵山に趣き兼て用意せし餅竹と柿とを其籠の上に置きて已れは少し離れて木蔭にひそみて山雀の羅らんとを窺ひ居たりしが待間程なく五六羽の山雀とび來り聲高く囀りければ折好しと尚瞳を定めて見居たりしが今此山雀に就て聊か感覺を起しつるとあり其は先づ彼の山雀が柿を餌まんとする樣を見るに雄鳥は其活潑にして勢ひ強く飛び來る樣は恰も進取の性ある者の如く又雌鳥は雄鳥の已に柿に近づくも自分は稍暫時顧慮する樣ありて容易に近寄らずして雄鳥の樣子を窺ひ居る中雄鳥は遂に餅竹に足を止めんとして餅の爲めに已の翼を束縛せられしかば之を見て雌鳥は何れへか飛び去りけり今此山雀に就て其雌雄の天性を考ふるも雄は自から活潑にして進取するの天性あり雌は少しく事に顧慮する樣ありて自づから保守の天性あるが如く見ゆ夫れ人に於けるも斯の如し先づ壯年の頃に在つて見るも男子は其性尤も活潑にして進取力に富める事女子とは少し差あり又女子は何事に限らず餘り輕々しく事物に與からずして能く退ひて考ふる所あるは之れ自づから保守の天性ある者の如し其は且て本誌に於て巖本氏の論ひ玉ひし所にして本誌愛讀の諸君は能く熟知せらるゝならんが余も亦氏が論ひを見て男女天性の異なるとを愚かにも今此山雀に依て聊か感せし故におこがましくも爰に記して氏の說の能く盡されたるを贊せんとして長々と山烏の尾の夫れならで山雀の囀づる聲を諸共に雀々しくも斯くはものしぬ

○古戰場　磐城棚倉　阿部直子

ものゝふの草むすかばねくちはてし野邊の露こそ手向なりけれ

○月前眺望　磐城棚倉　鈴木丸子

秋の夜のさやけき月の見えたしにしくものなしと人しるらめや

○人生如夢　磐南　芦野明日香

長らへて在るも此世のうつゝかはたゞちに夢といふべかりけり

○早梅　長野櫻枝町　山口利奴

はるまたぬ梅さきぬとうぐひすにいざことつてよはなの下風

○淸水(今樣)　常陸　伊藤伊佐女

杖ひく山のふところも
翠を飾る夏の日の
谷間ながるゝ水の音
潺々として淸らなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

東京大學總理事務取扱文學部長從五位外山正一君序
日本傍聽筆記學會創立員速記法研究會員林茂淳君著

○速記術大要

全壹冊（既刻）
正價郵稅共廿四錢

米國女學士ボァン氏曰く速記術ハ女子に最も適切なる學術也何となればバ女子ハ男子に比すればバ事に綿密なる性質を有それバ也と。されバにや西洋諸國に於て女子の速記術を學ぶ者日を逐て增すとなれバ我邦に於ても先覺の女學生諸孃ハ宜く今日に當りて速記術を學び玉ふべし。此書ハ著者が世人の注意を惹き起さむが爲め著述されしものにて速記術の起原字体効用習熟の法西洋諸國に於て速記術の盛に行はるゝ現況我邦從來の筆記法の極めて不完全なりしと漢字か假字も書き取りと爲すに不便なると其他速記術に關せる百般の事項を平易簡明に記述せしものにて且參看に便せむ爲め辻新次矢野文雄末廣重恭三君が此學術に關して記述されし文章をも附載せるもの也。請ふ諸孃の速に熟讀玩味せられて速記術の効用の至大なるを覺り玉はむことを

發兌所　東京日本橋區馬喰町二丁目壹番地　興文社
賣捌所　東京本鄕區本鄕弓町一丁目廿番地　女學雜誌社

佛國女學士路易達尒克原著伊藤重固君譯
東京大學教授櫻井省三君閲山成哲造君校

○西洋東髮秘傳 附化粧秘傳

全壹冊美本
密書廿七入
定價六拾錢郵稅共六拾四錢

此書は西洋に名高き佛國風の東髮及化粧の秘法を示すものにて種々の東髮と自身に爲得る法を說明し其他髮の療治法を數多傳授せり又化粧術も我國にて思付ざる奇術多し御購讀の上御試驗あらんことを乞ふ

大賣捌所　東京神田雉子町　圍々社支店
賣捌所　東京本鄕弓町壹丁目　女學雜誌社

米國女教師ダツレー氏著

○育幼草 全

定價郵稅共金三拾五錢

右はダツレー氏が多年日本に在留して我國の敎育を硏究し幼兒育養法を考定せられて著はされたる必須の良書なれバ兒女を敎養せらるゝ父母は必ず一讀して至益あるを知り玉へ

大賣捌所　東京本鄕弓町一丁目廿番地　女學雜誌社

大鳥圭介君題字
津田仙君序
近藤賢三著

○廢物利用

正價郵稅共五拾五錢
一名すたれ物用ひ方　既刻

無用の物を變じて有用の品となし巨萬の富を得たる河村瑞軒は云ふ一度び眼を開けバ路上の塵芥皆な黄金なりと思ふに世間尙ほ用ふべきの廢物甚だ多し徒らに之を廢棄して不景氣を歎ずるハ寶の山を傍觀して手を空ふそるが如し著者之に慨し多年如此き廢物の利用法を究め且つ博く西洋諸國に行はるゝ製造の秘法を探り漸く新法八十餘條を得平易の文を以て此書を編集したり何人にても此方法を實行して無用の品を有用の途に利用せバ國の富を增し家れ益を興す實に難きに非ず

近藤賢三編輯

○農文溫故

一部正價郵稅共金拾錢
第一卷既刻

此書は隨筆雜書叢書等の中に埋れて世人の爲に普く知れざる有益奇珍の農文を集錄せる者なり我國古昔の儒者ハ皆な農事を重んぜるが故に其の經詩と說くの間に往々農文に關する至益の論議あり日本農術の知已たる者ハ決して之を棄つ可らざる也

近藤賢三編撰

○神童詩文

第一集既刻
郵稅共六錢

此編ハ小學雜誌及穎才新誌中の條作名吟を精撰し加之廣く其原稿を全國の學童に募りて最も卓絶なる者のみを編集し一々批評を加えたる無比の珍書なれバ一閲して我國神童の心血と味ふべく只だ後世恐るべしとの歎聲を發そるの外なかるべし請ふ購讀あれ

○女學雜誌合本

洋裝美本自第一號至第十號
正價運賃共前金五拾錢

婦女子に關する一切の說話記事等を編集したる者なれバ娘孃ある家への進物抔に供するにハ至極く適當なる佳品と謂ふべきなり

右前金にて賣捌仕候
東京本鄕弓町壹丁目

女學雜誌社書籍部

社告

弊社女學雜誌前金未だ御拂込なき諸君有之右ハ夫々郵便を以て御催促申上候得共今日に至る迄御廻金なき向も有之甚だ迷惑に御座候間至急御送金可被下候以上

女學雜誌社會計部告

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○土佐日記俚言解全一册　定價四拾錢　郵稅拾四錢

小中村淸矩翁按閱　佐々木弘綱先生評解
添註　佐々木弘綱先生解

○竹取物語俚言解全一册　定價四拾錢　郵稅拾五錢

○文話　鈴木弘恭先生著述　三大人批評幷ニ序　上下合本(完)　定價四拾錢　郵稅金拾錢

此書は古事記出雲風土記祝詞式續日本記竹取物語空穗物語伊勢物語源氏物語枕草子土佐日記蜻蛉日記紫式部日記更科日記十六夜日記等より撰集して本文の傍ニ眼目照應對句抑揚頓挫省筆等の發を附し一目して文法を了解し易く示されたるを黒川眞賴小中村淸矩田中賴庸等の卓識を以て詳細ニ評語を下し給ひたれバ眞に本朝作文ハ模範とす可き良書なり

東京本鄕元町二丁目六十三番地　發賣書林　藤田文苑堂謹白

○和漢洋諺　一册　定價金二拾錢　郵送稅金四錢

必山秋月新太郎先生題辞　象東散人序
櫻所干河岸貫一先生閱　里見法爾編輯

右は和漢西洋の俚諺格諺凡ろ一千餘種をイロハ順ニ編輯したるものにて演說講談及び作文に志す人々は必ず一册を袖中に蓄へなバ時に臨みて一句を探り得バ忽ち數千百言を爲すに容易なるべき良材多し乞ふ愛購せられよ

大賣捌　東京京橋區南鍋町壹丁目六番地　鴻盟社

○文學叢誌　一册郵稅共金六錢拾册前金　同五拾六錢○見本六錢封入

第七號目次○論說、碑文に記すも如何なる文体を用ふべき乎、天地間の物一個でハ文を成さゞる說○作文要話數章○文の体格法の辨○作文本末の差別○詩作の要訣○助辞ハ緊要なると○體物の七法、養氣の八法○新聞記者詩歌文集(七)○助詞の用法、讀書十六觀、古文のと○書學の心得○古文眞寶講義(四)○大宰純の話、史類を讀む心得、近松の筆才、風流とて無用にあらぜ、堀川の五藏のと○詩數首○外國語移入の說○雜報數件○諸報告○一月二十三日發行

發行所　東京芝西久保櫻川町八番地　萬春堂
賣捌所　東京本鄕弓町壹丁目廿番地　女學雜誌社

社告

●本社ハ前金御拂込なき間ハ雜誌發送不仕候間御注文の節ハ必ず代價郵稅共御送付可被下候●郵便切手代用ハ堅く御斷り申上候但し實際不便不得止の地に限り一錢郵劵一割增にて御送金可被下候●爲替ハ東京本鄕郵便局へ向け御振込被下共爲替劵を弊社に送付可被下候●通運便を以て御送金の節ハ通運賃ハ勿論同會社より弊社への配達料(壹錢)とも御拂置き可被下候●詩文和歌發句等の原稿御投寄の節ハ作者の國郡町村姓名等明細に御記入可被下候

每月五の日發　女學雜誌代價郵稅表(府內無遞送料)

一册	正價金四錢	郵稅一錢	合計 現金五錢
十册	前金卅八錢	同 十錢	合計 前金四十八錢
廿册	同 七十錢	同 廿錢	合計 前金九十錢
卅册	同 壹圓	同 卅錢	合計 前金壹圓卅錢

廣告正價表

一行一回揭出	但廿八字詰	前金五錢
三回以上	同	同 一割引
六回以上	同	同 二割引

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町 (大賣捌) 巖々堂

東京神田區雉子町　團々社支店
同日本橋區新葭町　眞明堂
同日本橋區馬喰町二丁目　自由堂
同京橋區木挽町壹丁目　萬字堂
同京橋區銀座二丁目　山口福松
同本鄕區元富士町　盛春堂
同牛込區肴町　活神堂
岐阜縣美濃國笹土居町　星菱書房
越後國長岡　大橋書房
大坂備後町四丁目　岡島支店

東京芝西久保櫻川町 (支局) 萬春堂

發行所
本局　東京本鄕區弓町壹丁目廿番地　女學雜誌社
持主兼印刷人　瀧田正義
編輯人　近藤賢三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY